

トレンド 2011 総選挙後のタイ 安定を妨げる王室の政治利用

タイはこれまでしばしば政情不安定に陥ってきた。しかしその対立構造が詳しく知られているとは言い難い。タイの王室、政党そして軍の動きを分析することにより、政情不安定の原因が見えてくる。

玉田芳史

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

たまだ よしふみ

一九五八年生まれ。京都大学大学院修士課程（政治学専攻）修了。法学博士。愛媛大学法文学部助教授、京都大学東南アジア研究センター助教授などを経て、二〇〇五年より現職。著書に『民主化の虚像と実像——タイ現代政治変動のメカニズム』がある。

タイの政治は、好調な経済を尻目に、混乱をきわめてきた。二〇一一年七月三日に実施された総選挙は、政治の安定に寄与するのだろうか。

「国王陛下を元首とする民主主義体制」の危機

混乱が長期化しているのは、王室を担ぐ勢力、つまり負けない勢力が脱民主化闘争という勝ち目のない戦いを繰り広げているからである。国王（一九二七年生まれ、四六年即位）は、軍事政権を打倒した七三年一〇月一四日の政変でヘゲモニーを握った。この政治体制は、公式には「国王陛下を元首とする民主主義体制」と呼ばれる。国王は象徴

にとどまることなく、首相と権力を分有し、最高の権威として政治上の重要事に関与する。

首相との関係は、一九八〇年代までは国王の上位が明確であった。しかし、一方では政治の民主化、他方では王室の危機に伴ってそのバランスは変化してきた。九〇年代に首相が民選議員に限定され、地方分権が始まり、選挙制度改革で投票が人物本位から政党本位へ変化した。こうした民主化の波に乗ったタクシンは、二〇〇一年総選挙で提示した政権公約を実行することで人気を獲得し、タイ政治では前例のない強い指導力を発揮した。それに対して、王室は国王が年齢を重ねて病気がちとなった。しかも、君主の

絶大な権威が法律に明文化されているわけではないため、王位継承によって君主と首相の関係は劇的に変化しかねない。王室にとつて強い首相と弱い君主の取り合わせは好ましくない。

そうした事態を回避する方法の一つは、首相をさほど有能ではなく、不人気で従順な人物に交代させることである。タクシンを批判する勢力が二〇〇五年に登場し、翌年に入ると黄シャツ（民主主義のための国民連合）を結成し、タクシン政権の退陣を迫りつつ、首相更迭を国王に請願した。しかし、辞任させられず、選挙で勝てる見込みもないため、王室支持派はクーデタに訴えた。そして、タクシンの資産を凍結し、与党タイラックタイ党（TRT）を解党し、選挙制度を改革して、復権阻止を図った。

ところが、〇七年一二月の総選挙では、タクシン派が再び勝利した。そこで、黄シャツは首相府や国際空港を占拠して政権に退陣圧力をかけ、他方で軍隊や裁判所に決起を促した。裁判所は料理番組出演を理由にサムック首相を失職させ、選挙違反を理由に与党を解党し政権を崩壊させた。間髪を容れず陸軍が政党政治家に働きかけて多数派工作に成功し、民主党への政権交代を実現した。〇八年一二月のことであった。

〇七年に結成された赤シャツ（独裁に反対する民主戦線）は、〇九年と一〇年の四月前後に首都で大規模集会を開いて、クーデタを糾弾し総選挙の実施を要求した。軍隊は〇八年の拱手傍観とは対照的に、実弾を用いた掃討作戦を展開し、一〇年にはタイ現代史上最多の死傷者を出した。政府は赤シャツに王制打倒を企むテロリストという烙印を押し、責任を取ろうとはしなかった。先例に反して、王室も発砲の制止や責任者の処罰に乗り出さなかった。失望や怒りのゆえに、赤シャツの支持者は激増した。

与党勢力の諸工作を覆す結果

今回の総選挙は、一二月の下院任期満了よりも半年ほど前に実施された。与党民主党とTRT系野党の一騎打ちであった。TRT系はTRT解党後結成された二代目政党が〇八年に解党処分を受けたため、三代目のプアタイ党である。TRT系は野党といえ民主党よりも議席数が多かった。与党の民主党は勝算が乏しいため赤シャツの総選挙要求を頑なに拒んできた。それが解散に踏み切ったのは、年末までには実施せざるをえない、早々と三月に予告すれば赤シャツの四月集会を阻止しうる、選挙対策で勝算が出てきた、といった理由からであろう。

選挙対策としては、第一に、二〇一〇年一二月以後政府職員の給与引き上げ、最低賃金の二五%引き上げ、庶民への低利融資、公共料金の無償化などの気前のよい利益再配分策を次々と打ち出していた。第二に、一年に入ると憲法を改正して選挙制度を改革した。民主党は前回の選挙で

比例区ではTRT系とほぼ互角であり、加えて今回のTRT系は比例区名簿第一位の首相候補が未定であった。このため、民主党は比例区では有利という読みがあり、中選挙区四〇〇、比例代表八〇を、小選挙区三七五、比例代表一二五へ変更した。第三に、民主党が弱い地域では、〇八年一二月にTRT系から分離して政権に加わった友党に期待した。内相ポストを与えられた同党は、内務官僚の人事異動、地方自治体への補助金や中央政府事業の箇所付けを利用した自治体への圧力で、集票マシーンの整備を進めた。しかし、五月に国会が解散されると、TRT系はタクシンの妹インラックを首相候補として擁立した。家業を手伝ってきた四四歳の女性実業家である。政治家としてはまったくの素人である。新風は強い追い風になった。陸軍総司令官は選挙戦さなかの六月一日にテレビに出演し、名指しを避けつつもTRT系と赤シャツを批判し、王室への敬愛の強い政党への投票を呼びかけた。軍首脳が見苦し

い介入をせざるをえないほど、TRT系は優勢であり、民主党に一〇〇議席以上の大差をつけて勝利した。同党の勝因は、タクシンへの支持、赤シャツからの支持、インラックへの支持、そして反タクシン派への不満といったところに求められるであろう。

インラック政権の不安要因

インラック首相は六党三〇〇名の議員からなる連立政権を樹立した。総選挙先送りが懸念されるなか、反タクシン派が総選挙の実施、TRT系政権の発足に応じた意義は小さくない。しかし、これで政治が安定するわけではない。同派はTRT系政権打倒を虎視眈々と狙っている。過去二度は、黄シャツが先兵となり、続いて裁判所が政権や与党幹部に有罪判決を下し、軍隊が最後に登場して政権を交代させた。今回も同じことが繰り返される可能性がある。ただし、打倒能力は少し低下しているように思われる。

まず、黄シャツは動員力が著しく低下している。次に、総選挙無効や与党解党といった判決を繰り返してきた憲法裁判所は、総選挙後の世論調査で国民の半数以上から信頼されていないことが明らかになった。裁判所は自傷行為を重ねることを躊躇せざるをえないであろう。最後に、

赤シャツ・黄シャツを 生み出す背景



政府支持者と衝突する
「赤シャツ」の人々
(ロイター／アフロ)

タイは伝統的な支配層が頂点に位置する階層社会であり、経済的な格差も大きい。相続税や資産保有への課税も存在しない。

1997年の通貨危機は支配階層の一部に深甚な打撃を与え、経済界の勢力地図を書き換えた。新たな「勝ち組」の支持を受けて2001年に登場したタクシン政権は、経済回復に努めつつ、大衆迎合的な政権公約を次々と実現していった。

強い首相の登場に懸念を抱いた王室支持派は、05年に国王への敬愛を示す黄シャツを着用してタクシンの退治に乗り出した。参加者は変化を嫌う都市部の既得権益層が多く、中核にはNGOやマスメディア、背後には伝統的支配層がいる。政治姿勢は選挙軽視やクーデタ容認である。

赤シャツは反民主化策謀に憤る雑多な勢力の寄り合い所帯であり、タクシン支持者、クーデタに反対する知識人、元共産ゲリラなど、階層や地域を横断している。人数からいえば農村部庶民や都市下層民が多い。彼らは社会的不公平の是正や選挙政治尊重を求めている。

こうした現象の社会的な背景として、第一に、貧富差を残しながらも社会が全体として底上げして豊かになったことを指摘できる。政治に関心を持ち、集会に出かける余裕が出てきた。第二に、情報流通量が増えた。地域ラジオ局が7000余へと激増して、全国一律で規制を受ける地上波テレビ放送や新聞と異なり、地域色や政治色の強い番組を放送している。また、黄・赤双方とも衛星放送を開局し、集会生中継などで煽動を繰り返した。インターネットや携帯電話の普及も重要である。

民主化が黄シャツを登場させ、黄シャツが赤シャツを登場させ、弾圧が赤シャツを成長させるというスパイラルが生じたのである。■（玉田）

二〇〇六年のクーデタは軍隊にとつて重荷であつた。各方面から批判を浴びながら、負の遺産を守るべく介入継続を強いられている。〇八年にはクーデタの決行を迫られたにもかかわらず、踏み切れなかつた。

ただ、たとえ政権を倒せなくても不安定化させ、憲法改正、タクシン復権、政権公約の実現などを阻止できれば大きな政治的利得になる。利権重視のプアタイ党と平等・正義重視の赤シャツには思惑のずれがあり、寄り合い所帯の赤シャツは分裂の可能性がある。少数派であるにもかかわらず、主要紙の論調を支配してきた反タクシン派は、この点をお突くであろう。首相に兄との縁切り、プアタイ党に赤シャツの切り捨てを迫り、赤シャツの内紛を煽るのである。

政治の新生のために

反タクシン派が場外乱闘ではなく、政党政治の土俵に上がつて戦おうとすれば、鼻頂の民主党の強化が不可欠である。同党が総選挙で勝つたのは一九九二年九月が最後である。政権は九七年や二〇〇八年のような裏工作ではなく、正攻法で握るべきである。しかし、民主党は南部地方では圧倒的に強いものの、それ以外には首都と東部で競争力があるにとどまり、第一党は望むべくもない。連敗脱出には

抜本的な改革が必要である。ところが、辞意を表明していったアピシットが再び党首に選出された。下院議席の半分強を占め赤シャツの地盤となつている東北と北部で、彼は一〇年の流血ゆえに憎悪的になつている。党首統投は、第一党断念に等しいといえよう。

最後に、王室に触れておこう。二〇〇五年に始まつたタクシン退治作戦では当初から王室が運動の御輿として担がれてきた。王室の政治関与や政治利用への批判が強まると、不敬罪の適用件数が激増し、インターネット上での王室批判への取り締りも強化された。締め付けの強化が一層の批判を招くという悪循環に陥つている。一年に庭野平和賞を受賞したタイを代表する知識人スラックによれば、王室が政治への関与を続けようとする限り、王制は現国王九世王で終わりを迎えることになる。王制を存続させようとするれば、象徴の地位を受け入れるしかない。しかし、タイの王室が世界有数の富豪であること、王室に依存して権威・権力・富を獲得・保持しようとする勢力が少なくないことを考慮すれば、その実現は容易ではなさそうである。王制を脅威に晒しているのは、タクシンや赤シャツではない。王室が政治利用に釘を刺し、政治関与を自制すれば、政治は安定する。諫言しうる側近がいないとすれば不幸というほかない。■